

	養液栽培	養液土耕栽培	土耕栽培
メリット	■ 土壤病害・連作障害がない ・土壤病害のために品種が限定されることがない。 ・土壤の物理性、化学性の影響、調節が必要でなく、そのコスト、労力が削減される。	■ 初期費用が比較的安い ・10アールあたり100万円～(簡易なものは50万円～)のコストが掛かるが、生育の安定化によりコストの回収、メリット作出は比較的容易。	■ 初期費用が安い ・従来のコスト:土づくり(有機物施用、土壤の団粒化、排水・通気・保肥力改善、肥料バランス、土壤病害対策)、土壤消毒など。
	■ 省力化 ・排水、土壤消毒、耕起、土寄せ、固形肥料の施肥・追肥、除草、作業がない。	■ 土の緩衝力(ストレス軽減) ・土が持つ肥料濃度の急変、乾燥の回避、地温の維持など根に対するストレスの軽減が期待できる。	■ 土の緩衝力(ストレス軽減) ・土が持つ肥料濃度の急変、乾燥の回避、地温の維持など根に対するストレスの軽減が期待できる。
	■ 状態の安定性 ・土壤のムラ、排水性、肥料濃度・バランスがコントロールできる。	■ 肥料濃度、土壤水分の安定性 ・機械的に肥料濃度、土壤水分を制御するので根にストレスを与えず、生育向上、均一性は高い。	■ 作業の熟練度 ・従来の技術の蓄積が活用できるため、初期の人為的なミスが少ない。
	■ 養液濃度による草勢制御が容易 温度、湿度とともに肥料濃度による草勢管理が容易で、ハウス全体を均一にコントロールできる。		■ 肥料濃度、土壤水分の安定性 ・緩効性肥料、自動灌水施設を併用することで安定性を高めることはできる。
	■ 企業の経営ヘシフト ・培地状態の安定化、給液管理が向上すればするほど大規模栽培での技術の再現性が高まり、マニュアル化、経営の安定化が容易となり企業的な経営にシフトしやすくなる。		
デメリット	■ 初期費用が高い 噴霧耕、循環、非循環各システム差があるが、廉価版でもおおむね400万/10a以上のコストが掛かる。	■ 土壤病害・連作障害 ・土壤病害のリスクは残るため、台木、品種の制約は回避できない。	■ 土壤病害・連作障害 ・土壤病害のリスクがあるため、台木、品種の制約がある。
	■ 肥料コストが高い 最近各自で単肥の配合を行うケースが増加し大幅なコスト低下傾向にある。	■ 労力 ・排水、土壤消毒、耕起、土寄せ、固形肥料の施肥・追肥、除草、作業労力、コストが掛かる。	■ 労力 ・排水、土壤消毒、耕起、土寄せ、固形肥料の施肥・追肥、除草、作業労力、コストが掛かる。
		■ 肥料コストが高い 最近単肥の配合を行い大幅に低下傾向にある。	■ 肥料濃度、土壤水分が不安定 ・天候、排水性、肥料濃度、土壤水分が不安定なので根にストレスを与えるリスクがある。生育の均一性は比較すると劣る。
		■ 土壤管理労力、コスト ・反面土づくり(有機物施用、土壤の団粒化、排水・通気・保肥力改善、肥料バランス、土壤病害対策)の労力、コストは掛かる。	
		■ 肥料濃度による草勢制御はできない。また水分ストレスによる制御は気孔開度への影響が伴うので不向き。	